青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連

藤田ミナ*・岡本祐子*

The Relationship between Mother-Daughter Relationship and Identity in Adolescence

Mina Fujita and Yuko Okamoto

In the present study, we elucidated the association between mother–daughter relationships and the identities of daughters during adolescence. We also determined the differences in the identities of daughters who lived with their mothers and those who lived separately. Using a mother–daughter relationship scale and an identity scale, we surveyed 112 female college students. We performed a factor analysis of the mother–daughter relationship scale and extracted two factors, i.e., codependency and bonding. We found a negative correlation between the identity score and the codependency factor score of the mother–daughter relationship; we also found a positive correlation between the identity score and the bonding factor. Furthermore, daughters who lived separately had higher identity scores than daughters who lived with their mothers. However, evidence suggested that this difference was not because of the mother–daughter relationship.

Key Words: mother-daughter relationship, identity, adolescence.

問題と目的

母娘関係

近年，子どもを持つならば息子より娘を望むという親が圧倒的に多く，性別選好が逆転しているという（厚生省人口問題研究所, 2002）。科学（医学）技術の進歩や産業構造の変化によって，親にとっての子どもの価値が変化しており，戦後まで親は子どもに労働力・経済的な支えを期待していたが，その後，親は子どもに精神的価値を期待するようになっている。また，近年では親子関係に関して親への反抗よりもむしろ親との情緒的結びつきの強化が指摘されている（山田，1988）。加藤（1987）は，親子関係の観点から現在の家庭をみると，小規模化，核家族化により家族内の人間関係が単純化し，特にきょうだい数の減少は親と子が直接結びつく形を進行させており，加えて，外での人間関係は人格的結合が希薄になっているので，それを補う形で親と子が情緒的に融け合おうとする気持が強いため，親子関係が予想以上に密接になっていると述べている。このような中で，

* 広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education, Hiroshima University）

「一卵性母娘」や「友達母娘」などの言葉で示されるように，母娘関係の親密さは注目を集めている。父ー息子，母ー息子，父ー娘，母ー娘というように，親と子それぞれの性別の組み合わせにより異なる面があるが，母親と娘は同性であるため，親子間の心理的距離が近く，親密な関係を築くと言われてきた。青年期において，母娘関係はアイデンティティ形成，性受容において重要だが，一方で仲のよい母娘関係が危ういとする見方も存在する。先行研究において，母親と娘の緊密な関係は姉妹のような相互依存的な関係のようであるが，両者の人格発達や自立を阻むようなネガティブな面をもった関係であると言われている（渡邊，1997，北村，2008 など）。一見，仲が良くて幸せそうに見えるが，娘の側では母との関係に息苦しさを感じ，心身に問題が生じてカウンセリングに訪れるケースが幾例もあるという（高木・柏木，2000）。

高木・柏木（2000）は，母親は，子どもの中でも息子より娘からのサポートを圧倒的に多く得ており，子どもに対して抱く期待や感情においても，強さの上で明らかに異なり，将来に対するしてもらいたいという期待や，娘の人生に介入して生きたいという希望，また，娘を理解者とする気持ち，自分とは一心同体のものであるという気持ち，の全てにおいて息子よりも娘に対しての方が高いことを示唆し，娘と息子では母親にとっての位置づけが異なることを明らかにした。信田（1997）は，仲の良い母と娘を一卵性母娘と表現している。一卵性母娘とは，母親と娘が，情緒的にも経済的にも互恵的な関係を結びやすく，親密にすることでお互いに得るものがある，支えあいの関係である。信田は現代の一卵性母娘はもっと積極的に把握されてよいとし，一卵性母娘において問題なのは「共依存」に陥った場合であるとしている。また，渡邊（1997，2003）は，大人には許されないという否定的な意味を前提とした他者への情緒的依存を，「依存」，他者との相互理解・信頼関係に基づき他者を心の支えとできる肯定的・情緒的結びつきを「絆」と定義し，依存概念を２つに分類した。さらに，娘のほうが息子よりも母親との依存・絆が強いことを示唆し，このことから母親と娘の関係が「自立を助け合う対等な暖かい対人関係」であると考えた。母親は「娘の自立を助ける誇り」を持ち，娘は「自分の自立を助けてくれる相手への敬愛」を持つという。しかしながら，母娘との関係が緊密であるからこそ「依存」と「絆」が分離せず，依存の否定的な意味である「もたれ合い」「共依存」も含まれる可能性があるという。

共依存

日本では共依存はまだあまり認識されていない。その特徴については研究者によって様々に表現され，明確に定義されていないが，自己評価や同一性を他人に委ねる「自分らしさの喪失」に通じる表現が多く，「人間関係の病理」「対人関係の病理」などの「関係性の病理」である（緒方，1996）。共依存という言葉は 1970 年代末にアメリカの嗜好臨床の現場から生まれた。それまではアルコールやドラッグの依存症は、個人の問題として治療されてきたが、個人治療だけでは効果が少なく、回復の兆しを見せていた依存者が同じ家族の中に帰って行くと再発する事例が多くあり、アルコール依存症を関係性の中で把握しようとする傾向が強くなっていった。アルコール依存症者には、その嗜好を支える妻としての優しい支え手（イネイブラー）が存在し、アルコールや薬物などの依存者に対して依存を続けることができる状態を作り，結果的に様々な家族間の問題を抱えてしまうという悪循環に陥らせてしまうのである。実際にイネイブラーの変化に取り組んでみると、ただ単に「ア

ルコール依存症者の支え手」という位置づけでは済まされないほど、その回復が困難である現実に直面することとなった。そして、このイネイブラー自体を深刻な病理を抱えた一つの問題として扱う「共・アルコール依存（Co-Alcoholic)」という言葉が登場した。しかし、依存者に手を貸してしまう人がアルコール依存症に限らず、さまざまな依存症者の周辺に共通して見られることが明らかになり、それまでのようにアルコール依存症という特定の嗜癖に関係付けられた「共・アルコール依存」という用語では対応できなくなった。そこで嗜癖者との関係性の病理を表す表現として「共依存（Co-dependency)」という言葉が成立するに至ったのである。ここで共依存を「関係性の病理」あるいは「人間関係の嗜癖」として広義に解釈し、受け入れるようになった。現在では共依存はアルコールやドラッグなどの嗜癖だけではなく，健常者にも見られる性質のものであるといわれている。共依存は，子ども時代のトラウマや，育ってきた家庭内の機能不全状況に適応する中（過剰適応）で生じる。Wegscheider-Cruse（1990）は、①愛や結婚によって嗜癖者との関係に取りこまれた人、②アルコール依存症の親や祖父母を持つ人、③情緒障害的な家族、すなわち機能不全家族のもとで成長している人のいずれかに該当する人は共依存であると述べている。また，Wegscheider-Cruse（1990）は共依存の出現率に関して，米国の全人口の約96%であると提示している。これは共依存が人間関係を問題にするためであるという。共依存は人間関係のあるところに存在することから，米国に限ったことではなく，相互依存社会といわれるわが国においても軽度なものも含めればその割合は低くないことが推測でき，健常者として生活している人の中に共依存者が含まれると考えることができる。

それでは，共依存の特徴とは具体的にどのようなものなのだろうか。斎藤（1995）は共依存の特徴を以下の５つにまとめている。

①否定的エンメッシュ：他人の世話を焼き，他人に頼られることで自分の存在を認めさせよう，それによって自己の安全も得ようとする態度。一つの家庭内で過度に絡み合った夫婦，親子の人間関係を指す。配偶者や母親にみられる過干渉的態度などがこれに含まれる。

②恨み：自分を犠牲にして世話をし，さらにそれが報われなかった「恨み」の感情が弱い者（否定的エンメッシュの対象）に向けて解放する。夫に不満をもつ妻が，聞き分けの良い娘に夫の愚痴を垂れ流す時，彼女のしていることは，この種の恨みの開放である。もっと微妙な場合では、姑との関係に苦しむ嫁が、娘の前で暗い顔をして溜息をつく、あるいは肩を落として涙を流す。これだけの動作で、この嫁の恨みは娘にむかって解放されている。娘は説明されない母親の怒りのエネルギーに無防備にさらされ、母親に対して理不尽な罪悪感を持つ。この罪悪感が母親の否定的エンメッシュを強化し、母・娘相互の共依存関係は更に緊密になる。

③スピリチュアリティの障害：いつも周囲の他者に対して上か、下か、支配するか、服従するかという関係が生じてしまい、対等で相互交流的な関係が結べない。

④嗜癖と心身の障害：共依存者の感情生活は、恨みと不安と恐れ（特に他人の期待を裏切ることの恐れ）を除けば空虚なものである。この空虚感は抑圧された怒りと一緒になって無気力と抑うつを招くが，それを回避するてっとり早い手段としてアディクション（嗜癖）がよく用いられる。

⑤親密性からの逃走：共依存者はいつも，誰かにベトベトとまとわりついて世話したり，心配した

りしているが，それは自分が付きまとう人に対して優位を保っているとき，あるいは依存しているときに限られる。そこでの関係はあくまでも「世話」であり「服従」なのであって，相互が適度に温もるような親密さではない。

また，Wegscheider-Cruse (1990) は，共依存には以下の５つの役割があることを指摘している。
①支え手（イネイブラー）：依存者の世話をやく配偶者。依存者の責任や機能まで引き受ける。
②家族英雄：「機能不全家族」に出現する，勉強やスポーツや仕事ができる子ども。家族に希望や誇りがないので，子どもが家族にそれらを与える役割を持つ。
③マスコット：「機能不全家族」の中で明るく振舞うことで，自分に注意を引くような子ども。依存者の人生や，家族を明るくする役割を持つ。
④犠牲者：「機能不全家族」に適応できない子どもや配偶者。
⑤失われた子ども：家族の中で孤立し，孤独感や抑うつ感を感じて引きこもっている。
この５つの役割によると，①は妻の役割だが②～⑤までは子どもの役割である。したがって，妻だけではなく「子ども」も共依存になることを示唆している。

共依存に共通する行動特性としては，他者の世話に夢中になり，他人を思い通りにコントロールしようとすることがあげられる。したがって，親子関係のような上位と下位が明確である関係で露骨に表現されるという（斎藤，1999)。信田（2001）は，母子関係における共依存について，「母親からの共依存は，成長過程で苦しみはそれほど意識されない。子どもは母が感じていることを我がことのように感じ，母の期待を先取りしてひたすらいい子として成長するのである。思春期以降になると自分が感じていることが，自分の感覚なのか，母の期待に添っている感覚なのかの区別がつかないこともある」と述べている。

先にも示したように，母親と娘は他の親子関係と比較して緊密である。そのため，母親は娘に対して親しいあまり，娘との境界が曖昧になり，結果として娘の人生に支配的に関与する可能性もあるという（高木・柏木，2000)。したがって，他の親子関係と比較して共依存に陥る危険性も高いと想定され，母と娘が共依存である場合では母と娘の境界が曖昧になり、娘は主体性や個性を得ることが困難になると考えられる。

アイデンティティ

アイデンティティは「自己の斉一性」「時間的な連続性と一貫性」「帰属性」の感覚が統合されたものであることから「自分らしさ」の感覚ともいわれている。Erikson (1959) は，青年期の発達課題として，アイデンティティの形成を提唱した。アイデンティティの形成とは，「自分とは何者か」「自分には何ができるのか」という「同一性」の問題に，自分で悩んだ末に答えを導きだし，その答えに自分で納得し，それに従って行動できるようになることである。それは，乳児期以来形成された様々な考え方，感じ方，価値観が青年期において取捨選択され再構成されることで成立する，統合された自我の状態である。アイデンティティの形成は，他者からの分離や，自律によってのみではなく，他者との関係性の中で起こることが強調されている。アイデンティティを形成するきっかけは，両親，友人，恋人といった，他者との関係性のなかにあり，このような関係性は，アイデンティティを形成するための不可欠な“土壌”として存在しているといわれている。多くの先行研

究で，青年期におけるアイデンティティの形成過程において親密な友人をもつ重要性は大きいことが示されているが，Erikson は，アイデンティティの形成に及ぼす影響として，他者との関係性の中でも青年の世話をし，養育する人々との関係の重要性を指摘している。青年たちは，親からの制御と権威から離れ始め，友人，仲間集団とより強い関係を築き始めるが，この焦点の移行は，両親が，青年である我が子の発達に対する重大な貢献をもはやしないということを暗に意味しているのではなく，個性化や両親との関係を外界と精神内部との両方からの再交渉，そして自分自身の決定とライフコースに対してより多くの責任を負うことなどが青年たちに生じ始めることを意味している（Kroger,1996）。

親子関係とアイデンティティとの関連を検討した先行研究では，子どものアイデンティティの獲得には親の過保護ではない受容的な態度が重要であるとされている。なぜならば“自分は独自の存在であり，いかなる状況でも他者から認められ，自分でも認めることができる”という自己を冷静に認識し肯定的に捉える必要があり，そのためにはまず他者が自分を受容してくれることが基盤となるためである。他者の中でも生まれた時から存在し，長い年月に渡り関わっている家族から受ける影響は大きいと考えられる。また，青年期の親子関係とアイデンティティ形成過程との関係に性差があることが明らかにされている。田中（2003）は，女子では母親が統制的であるか自律的かよりも受容的であるか拒否的であるかが自我同一性の確立に重要であり，一方，男子では母親が受容的であるか拒否的であるかよりも統制的であるか自律的かが自我同一性に重要であることを示唆した。また田中は，父子関係よりも母子関係の方がアイデンティティの発達にはるかに強い影響を及ぼすことを示唆している。

以上のことから，青年期の男性と女性ではアイデンティティ形成の経路が異なり，さらに女性は男性と比較してアイデンティティの形成において母親からの影響をより受けやすいと考えられる。

本研究の目的

本研究では母と娘の関係のあり方が，娘の主体性，個性にどのように関連しているのかについて検討を行うことを目的とする。母娘に特有とされる「親密」な関係では娘の主体性，個性の獲得を阻害することはないが，その関係が「共依存」に陥ったときに娘の主体性，個性の獲得を阻害することを検証する。三砂・竹原・嶋根・野村（2006）は母親との関わりに対する肯定的な気持ちを表す「親密」，母親が娘に対してコントロールや過剰な接触をしていることを表す（≒過干渉）「支配」，母親に受け止められているという感覚の「受容」，親の期待に答えようとする「服従」の４つの下位尺度から構成される母娘関係尺度を作成した。三砂らによれば「支配」「服従」の２つの因子を用いて，母娘双方から関係性を評価することができるという。また，「支配」「服従」因子を併せて検討することで母娘の共依存関係を尺度の得点に反映させることが可能であることから，本研究ではこの尺度を用いる。また，主体性，個性の指標としては，自分らしさの感覚と定義されるアイデンティティを用い，主体性や個性といった独自性を獲得するということについてアイデンティティによって測定できるとした上で，母娘関係がアイデンティティの形成に影響を与えると推測する。

また，藤原・伊藤（2007）は，母娘関係において，母親側の娘を抱え込もうとする様子を表す「母の支配」が，同居群と非同居群で差があることを明らかにしている。母親と娘が同居の場合，娘に

対する一心同体感が増し，母親が娘に対してより支配的に関わると思われる。一方，非同居の場合では経済的には親に依存しているものは多いだろうが，娘の側で母親から離れ，生活に関する様々な選択を自らで決定していることから自主性や自律性を得る機会が多いと考えられ，自分が自立しているという感覚を抱きやすいと考えられる。また，親から離れて一人で生活できるという自分への信頼が生まれ，より自己価値を見出すことができると考えられる。したがって，同居であるか非同居であるかはアイデンティティの確立の一因であると考えられる。したがって，同居・非同居により，娘のアイデンティティの形成に違いがあるかどうかも併せて検討する。

方法

調査対象者　女子大学生 112 名。平均年齢は 19.45 歳（SD＝1.22）であった。

測定尺度　(1) 母娘関係尺度（三砂・竹原・嶋根・野村，2006 による 16 項目；５件法）

三砂・竹原・嶋根・野村（2006）が作成した母娘関係尺度であり，「親密」（６項目），「支配」（4 項目），「受容」（３項目），「服従」（３項目）の４つの下位尺度から構成されている。回答は「１.全くあてはまらない」から「５.非常にあてはまる」の５件法で評定された。質問項目はランダムに配置した。

(2) アイデンティティ尺度（下山，1992 による 10 項目；４件法）

下山（1992）が作成したアイデンティティ尺度のなかのアイデンティティの測る項目（計 10 項目）を使用。「１.全くあてはまらない」から「４.よくあてはまる」の４件法で評定された。アイデンティティ形成の程度が高いほど高得点になるように，各項目への回答し対して１－４点を与えた。質問項目はランダムに配置した。

また，フェイスシートで調査対象者の年齢，母親，もしくは母親をイメージできる人がいるかを問う質問，母親と別居か同居かを問う質問を尋ねた。

手続き　講義時間中に質問紙を配布し，集団的に実施した。また，他校の女子大学生に質問紙を郵送し，回答後に返送してもらい回収した。調査時期は 2008 年７月－８月であった。

結果

1.　母娘関係尺度の因子分析

母娘関係尺度に対して因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った（Table 1）。因子負荷量が 0.4 以上の項目を採用した結果，２因子構造となった。三砂ら（2006）の先行研究では，「支配」因子と「服従」因子を考慮することによって共依存関係を検討できるとしている。よって，「支配」因子と「服従」因子の２つの因子が結合してできた第１因子を「共依存」と命名した。渡邊（2004）は，他者との相互理解・信頼関係に基づき他者を心の支えとできる肯定的・情緒的結びつきを「絆」と定義している。本研究ではこの定義を取り入れ，母娘関係において肯定的な側面を反映した「親密」と「受容」の２つの因子が結合してできた第２因子を「絆」と命名した。「共依存」７項目，「絆」９項目となった。因子ごとの Cronbach の α 係数を算出したところ，「共依存」因子では α ＝.90，「絆」因子では α＝.92 であった。

Table 1

母娘関係尺度の因子分析結果（主因子法，バリマックス回転）

質問項目（16 項目）	第 1 因子	第 2 因子	共通性
第1因子：共依存（α=.90）			
13.母は私を縛っていると感じる	.88	−.15	.80
10.母は私を思い通りにしようとする	.83	−.18	.73
2.母は私の行動を支配したいようだ	.83	−.21	.73
12.私は母の機嫌を見ながら行動することが多いと思う	.69	−.22	.52
5.母は私の友人関係についてあれこれと口を出す	.68	−.06	.47
6.私は母の感情や言動を気にしすぎる	.65	−.08	.42
15.私は母の筋道の通らないことでも、言いなりになる	.61	−.10	.39
第 2 因子：絆（α=.92）			
4.母と話をするとうれしい	−.09	.84	.72
11.母に会いたいと思う	−.14	.84	.72
7.母と一緒にいると落ち着く	−.21	.84	.74
8.母はいつも私のことを見守っていてくれると思う	−.12	.81	.66
3.どのようなことがあっても母は私の見方であると感じる	−.07	.77	.59
9.母は私が喜ぶと一緒に喜んでくれる	−.11	.74	.56
14.母のところへはいつでも帰れる気がする	−.10	.69	.49
1.嬉しいことは母に言いたいと思う	−.15	.59	.37
16.母は私をたくさんほめてくれる	−.07	.58	.34

2. アイデンティティ尺度の信頼性

尺度の内的整合性を検討するため Cronbach の α 係数を算出した。α=.82 となり，尺度を構成する質問項目が内的整合性を持つことが示された。

3. 母娘関係とアイデンティティの関連

アイデンティティの確立と母娘関係との関連を見るために相関係数を算出した（Table 2）。分析の結果，アイデンティティと「共依存」因子との間に弱い負の相関が見られた（r=-.20，p<.05）。また，アイデンティティと「絆」因子との間に中程度の正の相関が見られた（r=.32，p<.01）。

Table 2

母娘関係とアイデンティティの相関

	共依存	絆
アイデンティティの確立	−.20*	.32**

*.p<.05, **.p<.01

4. 同居と非同居

同居群と非同居群におけるそれぞれの人数とアイデンティティの得点を表 4 に示した。アイデンティティの確立の違いを検討するために t 検定を行った（Table 3）。その結果，同居群と非同居群では有意な差がみられ（t(1,110)=4.22,p<.05），仮説は支持された。

Table 3

同居群・非同居群におけるアイデンティティの比較

	同居群(n=59)	非同居群(n=53)	t値
M	25.80	27.55	4.22*
SD	4.28	4.66	

*p <.05

さらに，同居群と非同居群において「共依存」因子と「絆」因子の得点が異なるかを検討するために t 検定を行った（Table 4）。その結果，「共依存」因子の得点に有意な差は見られなかった（t(1,110)=0.12, *n.s.*）。また，「絆」因子の得点においても有意な差が見られなかった（t(1,110)=1.77, *n.s.*）。

Table 4

同居群・非同居群における母娘関係の比較

		同居群(n=59)	非同居群(n=53)	t値
共依存	M	16.59	16.15	0.12 *n.s.*
	SD	6.42	6.87	
絆	M	35.22	33.32	1.77 *n.s.*
	SD	7.19	7.77	

考察

母娘関係尺度の因子構造

三砂ら（2006）は母娘関係を「親密」「支配」「受容」「服従」の４つの因子に分類していたが，本研究では「支配」因子と「服従」因子が一つにまとまって「共依存」因子，「親密」因子と「受容」因子が一つにまとまって「絆」因子の２つに分類され，先行研究との相違が見られた。三砂ら（2006）によって分類された「支配」因子は，母親が娘に対してコントロールや過剰な接触をしていることを表す項目から構成されている。「服従」因子は，親の期待に応えようと行動する傾向を表しており，娘の行動傾向を評価する視点を取り入れている。「親密」因子は，母親との関わりに対する肯定的な気持ちを表しており，母親に対する愛着や愛情を表している。「受容」因子は，母親に「受け止められている」という感覚を表しており，心理的安全基地の働きに類似していると思われる。先行研究における「支配」と「服従」の２つの因子は主従関係におけるそれぞれの立場に焦点を当てたものであるので，母親が支配的（過保護）な場合では一般的に子どもは服従してしまい，支配を避けることが難しく逃れることが稀なので，本研究では２つに分類されず，１因子になったのではないかと考えられる。また，「親密」因子と「受容」因子の２つの因子では，母親への肯定的な気持ちを表し母親への接近を望んでいると考えられる。また，母親に受容されているからこそ母親に対して肯定的な感情を抱き，母親と親密であるからこそ受容してもらえるという相乗の効果が推測できる。

したがって，母子関係に限っては「親密」と「受容」は相補的な関係にある概念であり，明確に 2 つに区別することは困難なので 2 つの因子が 1 因子となったのではないかと考えられる。

母娘関係とアイデンティティとの関連

「共依存」因子とアイデンティティの確立に関しては負の相関が，「絆」因子とアイデンティティの確立に関しては正の相関が見られた。「共依存」因子は，母親が娘に支配的・過保護的にかかわる「支配」因子と娘が母親の存在を気にしながら行動を決めてしまうなどの行動傾向を表す「服従」因子が合わさった因子であり，「共依存」因子が高いことは娘が母親の人生に巻き込まれている状態を表す。共依存は，性的虐待や近親相姦，暴力，ネグレクトなどの目に見える虐待とは異なり，一見子どもの育てられ方に問題はないので，「見えない虐待」「やさしい暴力」とも言われている（斎藤，1999)。母と娘の関係が共依存的である場合，娘の存在は母親の自己愛の延長のような状態であり，母親は娘にいろいろなことを期待して，娘が母親の期待に応えることで母親の欲求を充足している。自身の欲求は満たされず，娘は母親の欲望を自己に取り入れ，それを自分の欲望のようにして生きており（小高, 2006)，母親の要求が娘の要求より優先され，その上その要求を満たす責任が，母親から娘へとシフトされている状態である (Donaldson-Pressman. S., & Pressman. R. M., 1994)。この場合、娘は「認めてもらえない」「認めてもらえないのは自分に欠陥があるからではないか」と自分を責め、自分自身の感情や価値を信頼し肯定することができないと考えられる。青年期においてアイデンティティを確立するためには，幼少期から現在の経験を通して自分自身を信頼し，自己の可能性を発展させようとする構えが必要であるが，共依存の場合では，自分自身を信頼するというアイデンティティの基盤の獲得が困難であると考えられる。したがって，「共依存」因子がアイデンティティの確立を阻害する要素であることは妥当であるといえる。共依存の概念は，人間関係そのものを問題にしているので，もし共依存が精神病理と定義できるならばほとんどすべての人が精神病理であるという可能性が出てくる（斎藤，1999)。そのため異常が正常となり病気として成立しないということから，医者や臨床家にとっては扱いにくい存在だという。しかし，本研究の結果より共依存は青年女子の心理的適応に支障をきたすことが示されており，さらに，共依存が心身症を出現させることも報告されている。したがって，共依存は精神病理の観点からもっと積極的に研究されてもよいと考えられる。今後共依存についての十分な研究が望まれる。

一方，「絆」因子は現在注目されている一卵性母娘のよい面を反映している。「娘が抱く母親への愛情・愛着」と，娘が母親から受け入れられることによって感じる，「母親からの愛情」という，母娘相互の想いが存在することで生じる側面である。娘は母親から受容されることにより，自分あるいは自分の生き方は価値あるものだと認識され，自分を肯定的に捉えることができ，自分は自分，他人は他人といった独自性が得られると考えられる。また，どのような事態になっても母親から受け止めてもらえるという安心感は，物事に挑戦する基盤となり，挑戦の場での様々な出会いから自分を見つめなおし，他人の中での自分の位置づけ，持ち味を認識する機会が多くなると考えられる。これらのことから，「絆」はアイデンティティの確立を促進させる要素だと考えられる。

同居と非同居について

母親と離れて暮らしているものは，一緒に暮らしているものよりアイデンティティが確立されて

いるということが示唆された。先行研究において，同居群では母親と同居していることで母親からの押し付けや口出し，囲い込みなどの母の支配を受け続け母親の支配が高まる（藤原・伊藤，2007）と考えられていた。しかしながら，本研究では同居群と非同居群において共依存（≒母親の支配），絆ともに差は見られなかった。したがって，同居群，非同居群のアイデンティティの確立の差は母娘関係ではなく，別の要因が関係していると推測される。

その要因としては家族機能が考えられる。家族機能とは，青年と家族のかかわりを親子関係という二者関係ではなく家族成員それぞれが相互作用しあう，全体として一つのまとまりを持つ有機的なシステムとして見る家族システム論（尾形・宮下，2000）のもとで，家族全体の関係を捉えようとする試みのための指標のひとつである。わが国における家族機能に関する実証研究や事例研究の多くは，Olson, D. H（1979）の家族機能の分析枠組みを活用しており，共通概念のようになっているといえる。このOlsonの提示している家族機能の概念には纏綿，遊離という負の情緒的つながりが存在する。纏綿とは，家族成員同士に情緒的癒着が起こっている状態であり，このような状態にある家族は，家族全員，もしくは数人のメンバーが，自他の区別がついていないかのような同じ感じ方や考え方をしがちであるという。また，家族成員相互の依存性が高く，情緒的に独立できないといわれる。これに対して遊離は，他の成員を顧みず自らの欲求のままに動く「ばらばら」の状態であり，歪んだ独立意識をつくり，人間関係において必要な所属感や相互依存の有効性が学べないという。遊離状態にある家族メンバーは，お互いにまったく関わりがないように動いたり，特定のメンバー同士が強く結び付き他のメンバーを除外したり，ある１，２のメンバーを除け者にして，家族内緊張や不安を高めるのである。したがって，これら２つの負の情緒的つながりはアイデンティティの確立を阻害する一因となると考えられ，また負の情緒的つながりは非同居群と比較して同居群でより高くなると思われる。

さらに，別の可能性として夫婦関係が考えられる。夫婦関係は他の家族の成員にも深く影響を及ぼすことが示されている。先行研究において，夫婦の関係が，母親における娘の現在の位置づけや感情と，関連していることが確認されている（高木・柏木，2000）。平田（2006）は，夫婦間に情緒つながりがあり，夫婦間の葛藤が解決されている夫婦関係が，健康な家族の特徴に示されるような家族機能を最適なものとし，子どもの精神的健康が高まる傾向を示唆した。また，夫婦間の葛藤への対処や家族内の問題解決が，家族の健康性や子どもの精神的健康にとって重要であることを示唆している。したがって，同居群では非同居群に比べ両親と共に過ごす時間が長く，両親の関係を目の当たりにするのでその影響を受けやすいと考えられる。

しかしながら，これらに関しては推論の域を出ないため，他の要因も含め，同居群と非同居群におけるアイデンティティの差異については今後さらなる検討が必要である。

最後に本研究の問題点として，被検者の属性についての情報収集の甘さが挙げられる。娘の姉妹の有無，姉妹のなかでの出生順位についても検討する必要があると考える。なぜなら，家庭に複数の娘がいる場合，母親にとっての娘の位置づけが異なると考えられるからである。さらに，本研究では大学１年生から４年生を対象としたが，大学４年生では卒業後の進路について考える機会が多く，また進路が決定している者も多く，アイデンティティの確立について１～３年生とは異なった

様相であると思われる。したがって，アイデンティティの測定では被検者の学年（年齢）を統一することにより正確なデータになったであろう。

今後の課題

本研究では，青年期における母娘関係とアイデンティティの確立との関連，また母娘の同居・非同居によりアイデンティティの確立に違いが見られるかを検討した。本研究で使用した三砂・竹原・嶋根・野村（2006）が作成した母娘関係尺度では母と娘の共依存を「支配的なかかわり」という側面しか捉えることができず，母と娘の役割が逆転している点や娘が母を重荷に感じている点を正確に把握することが困難である。被検者自身の共依存傾向を測る質問紙はいくつか存在するが，母娘関係における共依存を測定する質問紙はわずかである。母娘関係における共依存を測る質問紙の作成が求められるだろう。また，母娘関係に影響を与えるとされる夫婦関係にも焦点をあて，母娘関係と夫婦関係との関連を検討することが必要である。

引用文献

Donaldson-Pressman.S., & Pressman. R. M. (1994). The narcissistic family—diagnosis and treatment. New York: Lexington Book (ドナルドソン-プレスマン.S., &プレスマン. R. M.　岡堂哲雄(監訳)・竹前ルリ・山口恵美子・真板彰子 (訳)　(1997). 自己愛家族—アダルトチャイルドを生むシステム—　金剛出版)

Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle. *Psychological Issues*, I (1). NewYork: International University Press. (エリクソン, E. H. 小此木啓吾(訳)　(1973). 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル　誠信書房)

藤原あやの・伊藤裕子 (2007). 青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係　青年心理学研究, **19**, 69-82.

福島朋子 (1993). 自立に関する概念的考察　発達研究, **9**, 73-86.

平田梨奈 (2006). 夫婦関係が家族の健康性と青年の精神的健康に及ぼす影響　北九州市立大学卒業論文（未公刊）

加藤隆勝 (1987). 青年期の意識構造　誠信書房

北村琴美 (2008). 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性—愛着感情と抑うつ傾向，自尊感情との関連—　心理学研究, **2**, 116-124.

小高　恵 (2006). 親から心理的・精神的に傷つけられることについての因子分析的研究　太成学院大学紀要, **8**, 59-68.

厚生省人口問題研究所(編)　(2002). 出生動向基本調査　厚生統計協会

Kroger. J. (2000). *Identity development: Adolescence through adulthood.* Newbury Park, CA: Sage Publication, Inc. (榎本博明訳 (2005). アイデンティティの発達　北大路書房)

三砂ちづる・竹原健二・嶋根卓也・野村真利香 (2006). 母娘関係尺度作成の試み　民族衛生　**72** (4), 153-159.

信田さよこ (1997). 一卵性母娘な関係　主婦の友社

信田さよこ (2001). 子どもの生きづらさと親子関係—アダルト・チルドレンの視点から— 大月書店

緒方明 (1996). アダルトチルドレンと共依存 誠信書房

尾形和男・宮下一博 (2000). 父親の協力的関わりと子どもの共感性および父親の自我同一性—家族機能も含めた検討— 家族心理学研究, **14** (1), 15-27.

Olson, D. H., Sprenkle, D. H., & Russell, C. S. (1979). Circumplex model of marital and family systems: I. Cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications. *Family Process*, **18,** 3-28.

斎藤 学 (1995). イネイブリングと共依存 精神科治療学, **10** (9), 963-968.

斎藤 学 (1999). 依存と虐待 日本評論社

下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で— 教育心理学研究, **40** (2), 121-129.

高木紀子・柏木恵子 (2000). 母親と娘の関係 発達研究, **15**, 79-94.

田中正 (1993). 親子関係と自我の確立 名古屋文理短期大学紀要, **18**, 7-14.

田中正 (2003).青年期男子における親の養育態度と自我同一性との関係 名古屋文理短期大学紀要, **27**, 1-4.

渡邊恵子 (1997). 青年期から成人期にわたる父母との心理的関係 母子研究, **18**, 23-31.

渡邊恵子 (2003). 母親と娘はなぜ親密か—青年期から成人期にかけて— 柏木恵子・高橋恵子(編) 心理学とジェンダー: 学習と研究のために 有斐閣, pp.31-36.

Wegscheider-Cruse, S., & Cruse, J. R. (1990). *Understanding co-dependency*. Pompano Beach, FL: Health Communications.

山田順子 (1988). 青年期の母子関係 心理学評論, **31**, 88-100.